

世界文学全集 34

ロマン・ロラン
ジャン・クリストフ

I

片山敏彦 訳

河 出 書 房

世界文学全集 34 ロマン・ロラン I



© 1969

編集委員

阿部 知二 伊藤 整
桑原 武夫 手塚 富雄
中島 健蔵

昭和35年5月24日 初版発行
昭和44年11月20日 36版発行

定価 430円

訳者 片山 敏彦
発行者 中島 隆之
印刷者 多田 基
装幀 原 弘

印刷・多田印刷株式会社
製本・中央精版印刷株式会社

発行所 東京都千代田区 河出書房新社
神田小川町三の六 株式会社

電話 東京 (292) 大代表 3711
振替口座 東京 10802

落丁本・乱丁本はお取替えいたします

0397—310134—0961

目 次

ジャン・クリストフ I

序		五
---	-------	---

一 曙

I		一五
II		四〇
III		八五

二 朝

I	ジャン・ミシエルの死		一二六
II	オットー		一六四
III	ミナナ		一九一

三 青春

I	オイラー家	二四三
II	ザビーネ	二九一
III	アーダ	三四三

四 反抗

I	ぐらつく砂地	四〇三
II	埋没	四九〇

解説	(訳者)	五七九
----	------	-----

ジャン・クリストフ
I

どの国の人々であれ

悩み　そしてたたかつており

やがて　勝つであらう

自由な魂たちに

ささぐ

主要人物

ジャン・クリストフ 幼い時から音楽を愛し、不屈の精神をもったこの物語の主人公。

ジャン・ミシエル クリストフの祖父。剛気で廉直な、もと宮廷の音楽指揮者。

メルキオール クリストフの父。酒におぼれてヴァイオリニストの地位を失う。

ルイーザ 心やさしいクリストフの母。

ゴットフリート ルイーザの兄。貧しい行商人をしているが信心ぶかく、クリストフには親切なやさしい叔父。

ハスラー 幼いクリストフに感化をあたえた有名な作曲家。

オットー クリストフの最初の友となった富裕な実

業家のむすこ。

ケーリッヒ夫人 クリストフの隣人である枢密顧問官の未亡人。

ミンナ ケーリッヒ家の娘、クリストフの初恋の少女。

オイラー老人 ジャン・ミシエルの友人で、クリストフ母子の家主。

フォーゲル 役場の書記をつとめるオイラー老人のむすこ。

アマリア 勤勉で口やかましいフォーゲルの妻。

ローザ クリストフをいたっているアマリアの娘。

レオンハルト 聖職者志望のアマリアのむすこ。

ザビーネ クリストフと同じ建物に住む若く美しい

未亡人。

ペルトルト ザビーネの兄。

アーダ クリストフの恋人となった町の女店員。

ミルハ アーダの女友だち。

テオドール 商館を経営するクリストフの伯父。

ロドルフ 商人志望のクリストフの弟。

エルンスト 意志の弱いクリストフの末弟。

マンハイム 雑誌「ディオニソス」の同人。富裕な

ユダヤ人。

ユーディット 知性的なマンハイムの妹。

コリンヌ 地方まわりをしている魅力的なフランス

女優。

ラインハルト夫妻 クリストフの友。地方の学校教

師。

シユルツ老人 クリストフの音楽を愛している大学

教授。

モデスタ ゴットフリートに救われた盲目の田舎娘。

ロールヒェン 勝気な農家の娘。クリストフの女友

だち。

シルヴァン・コーン（ハミルトン） クリストフの

幼な友だち。パリで社交界の流行児となっている。

ダニエル・ヘヒト 音楽出版社の支配人。冷淡なユ

ダヤ人。

テオフィル・クジャール パリのにせ音楽評論家。

コレット クリストフのピアノの弟子。富裕な実業

家の娘。

リシユアン・レヴィクール 懐疑的な金持ちの文学

青年。

アシル・ルツサン サロンに出入りする社会主義の

代議士。

シドニー クリストフの隣室の親切な召使い娘。

『ジャン・クリストフ』への序

『ジャン・クリストフ』が世に出てから三十年になろうとしている。クリストフの友であり、クリストフに愛情をもっており、そして、一般にクリストフ自身よりも明識のある作家が、クリストフの質素な揺籃ゆりかごの上にうつむきこんで、クリストフに、おまえは一ダースほどの数の親しい人々の範圍から外へ歩み出ることにはなかうと予言したそのとき以来、クリストフはずいぶん歩いた。彼は地球を縦横に歩きつくした。そして今では彼は地上のほとんどあらゆる言語によって物語る。ひどく珍しい衣装を着て、彼がそのかずかずの旅からもどってくる、彼の父は彼をそれと認めることがなかなかむづかしいこともときどきあるが、彼の父もまたこの三十年間に、世界のいろいろな山道で、足の裏をずいぶんすりへらした。私が、まだまったく幼いクリストフを腕に抱き取ったときのこと、そしてどんな条件のもとに私の男の子がこの世に生まれ出ることを求めたか、それを私が回想するのを許されたい！

*

『ジャン・クリストフ』が私の心の中に生きつづけた期間は二十年以上である。最初の発想は一八九〇年の春、ローマにおいてであった。書き終わったのは一九一二年六月である。しかし仕事の全体はこれらの期間を越えている。私が一八八八年に書いた草案があるが、この時期には私はまだパリのエコール・ノルマル（師範大学）に在学ちゅうであつた。

初めの十年間（一八九〇—一九〇〇）はおもむろに心の中で作品が孵化された時期であつた。私は内心に育つ一つの夢に集中しながら、目を見ひらいて、まったく別のいろいろな作品を書き上げていた——すなわち、『フランス革命劇』の初めの四つの戯曲（『七月十四日』『ダントン』『狼たち』『理性の勝利』）、『信仰の悲劇』『聖王ルイ』『アエルト』、『民衆劇論』その他。クリストフは、外から見ても見えないような、私の第二の生であつたのであり、これによって私は、自分の最も深い自我との触れ合いを取り直していた。一九〇〇年の終わりまで私は、あるいくつかの社会的なつながりによってパリの《広場の市》に關与していた。そして私はクリストフと同様に、自分がそこで精神的にひどく疎遠であることを感じていた。女性がその子を胎内に宿すように、私

が心の中に宿していた『ジャン・クリストフ』は私にとつては、奪取されることのない、私のブルク（城砦）であり、私の『静寂の島』であり、私は、敵意のある大洋のただ中で、ひとりでこの島に上陸すべきであった。私は無言のうちに全力をこれに集中した——将来のかずかずの格闘のために。

一九〇〇年以後、まったく自由独立の立場になった私は、私の魂の軍勢である夢たちを引き連れて、思いきって流れの中へ飛び込んだ。

最初の呼び声は一九〇一年八月のある夜、『スイスの』シュヴィーツ県のアルプスの高处から投げられた。この呼び声を私はこんにちまで世に発表しないでいた。しかし無数の未知の読者がその声の反響を——私の作品の壁に添うて飴なめしている反響をきき取った。それというのも、思想の中にある最も深いものは、声高く言い現わされるそのものではないのである。世界に散在している、私には見えない友らに、この作の源泉にあった悲劇的な友愛と、この雄々しいエネルギーの川が流れ出てきた始源である豊饒な悲痛感とを感じさせるには、ジャン・クリストフのまなざしだけで十分だった。

『嵐あらしの夜の山中で、稲妻の火が描き出す円屋根の下で、雷鳴と風との荒々しいとどろきにつつまれて私は思う

——すでに亡い人々を、やがて死ぬだろう人々を——空虚につつまれており、死滅に抱かれつつ回転しており、そしてまもなく死ぬだろうこの地球全体を。必ず死ぬ運命をもって生きているすべてのものに、私は、死ぬ運命をもっているこの著書をささげるが、この書の声は次のように言おうとする——「兄弟たちよ、われわれはたがいに近い。近づく。われわれをへだてているものを忘れよう。われわれみんなの共通の不幸のことだけを考えよう！ 敵たちは存在しない。悪人たちは存在しない。不幸な、みじめな人々だけが存在している。そして永続的な唯一の幸福は、われわれがたがいに理解し合うことによつてわれわれがたがいに愛し合うことである。——知と愛、ただこれのみが、人生の先と後とにある二つの深淵とんやんのあいだで、われわれの暗黒に浴びせかけられる唯一の光明のきらめきである。」

必ず死ぬ運命をもっているすべてのものへ——平等と平和とを与える死へ——生の無数の小川が流れ込む未知の海へ、私は私の作品と私とをささげる。』

モルシャッハ・一九〇一年八月

*

作品の決定的な引き締めを意図するよりもずっと前に、主要な挿話と人物たちについての草案が相当多く

作られていた。クリストフの姿は一八九〇年から、グランチアは一八九七年から書かれた。「燃え立つ茂み」のアナは一九〇二年じゅうにその肖像全体が書かれ、オリヴィエとアントワネットとは一九〇一年と一九〇二年とに書かれ、クリストフの死は一九〇三年に書かれた（それは、「曙」の最初の部分を決定的に書き始めるのにさきだつて一か月前のことだった）。

「一九〇三年三月二十日——今日私は『ジャン・クリストフ』を、決定した形で書き始める」と私が記したそのときには、私は麦の穂を選び分けてきっちり結んで束にしさえすればよかった。

『ジャン・クリストフ』を作るのに私が当てずっぽうに計画も立てずに仕事をしたかのように想像している、明察力の乏しい批評家たちの断言がどれほど虚妄であるかは明らかであろう。早くから私は自分が受けたフランス的な、古典的、エコール・ノルマル的な教育によって、たしかな構成への要求と愛とをもっていたし、またそれは私自身の血統のなかにもあるものだった。私は、ブルゴーニュの普請好きな人間どもの古い種族の子である。土台石をしっかりと置き、全体の大きい輪郭を決めてからでなければどんな作品にとりかかったことも私は決してない。最初のことばが紙に書き留められるにさきだつて、考えの中で作の全体が組み立てられたということに

ついて『ジャン・クリストフ』はその最たるものであった。一九〇三年三月二十日というその同じ日に私は自分の草案の中で、この詩作品の部分けを決めた。私は明らかに十の部分を一十巻を——前もって考えていた。そして今や決定した行数と、量と、つりあいとは、私がすでに書き留めていたものとあまり差がなかった。

これらの十巻の形を決める仕事に約十年かかった。一九〇三年七月七日に、スイスのジュラ山中のフロール・シェール・オルテンで書き始められたが、これは後に「燃え立つ茂み」の、傷ついているジャン・クリストフが隠れ家を求めに行くその同じ場所であり、樅とぶなとの悲劇的な決闘からほど遠からぬ地点であった。——書き終えたのは一九一二年六月二日、マッジョーレ湖畔のパヴェーノにおいてだった。作の大部分はバリのカタコンブ（墓洞）を見おろす位置にある古ぼけた家——モンバルナス大通り一六二番地で書かれたが、この家は表側においては重い車両の通行と《都市》の絶えまないところきに揺り動かされていたが、その反対の側は、修道院の古い庭の、太陽に照らされている静寂にひたされていて、この庭には二百年もの齢をもつ樹木が何本もあり、それらの木々は、おしゃべりのすずめたちと、くうくう鳴く山ばとたちと、快調の歌を歌う黒つぐみたちとに満ちていた。当時の私の生活は孤独な、不如意なものであ

り、友だちもなく、そして喜びといえは自分が仕事を通じて作り出す喜びのほかにはなく、その生活は、教授としての任務、論文を書くこと、歴史研究の仕事など、殺到するかずかずの勤めを背負っていた。生活の資を得るためのそれらの仕事の暇に、クリストフを書くために毎日一時間ずつを、またときどきはそれよりも少ない時間を使うことが私にはせいぜいであった。しかしそれらの十年間に、クリストフが私の生活の中に不在の日はただの一日もなかった。彼は語る必要すらなかった。彼は事実としてそこにいた。作者は自分の影と対話をする。そして聖クリストフの顔が作者を見つめる。作者はその顔から決して目を離さない……

«Christofori faciem die quacunq̃ tueris,
Illa nempe die non morte mala morieris»
(14)

*

物質上のどんな障害をも顧慮せず、また、フランス文学界において是認されているあらゆる因習ときっぱりと手を切っているこの長編の散文で書かれた詩を、パリの私の環境の、冷淡で皮肉な沈黙の中で、私に意図させ書き上げさせるにいたったその動機であるいくつかの考えを、ここに私は述べてみたい。この作が成功するかしないかは私にとってほとんど重要でなかった。成功はまっ

たく本質の問題ではなかった。内心の命令に従うことが本質的な問題であった。

長い経路の途中、『ジャン・クリストフ』のために私が書いた覚え書きの中に私は次のような、一九〇八年十二月のことを再び見いだす——

「私は一つの文学的な作品を書いているのではない。私は信仰の作品を書いている」

人間は信じているときには結果がどうであるかは顧慮せずに行動する。勝つか負けるかはどうでもいい。《しなくてはならないことをせよ！……》

私が『ジャン・クリストフ』によって引き受けた義務は、フランスの精神的な、また社会的な崩壊の一時代に、灰の下に眠っていた魂の火を再びめざますことであつた。そしてそのために、まず最初には、積もっている灰と塵埃とを掃除することであつた。空気が日光とを独占している《広場の市》に、あらゆる猥褻の用意をしており、どんな妥協からもしさぎよく身を持している、少数の、不屈の魂の人々を対立させることであつた。彼らの先頭に立つ者となるような一人の主人公の呼び声に応じてその者のまわりに、私は彼らを寄せ集めたかった。そしてそんな先達者が存在するためには、私はその者を作り出さなければならなかった。

私はこの先達者に二つの根本的な条件を求めた——

——ヴォルテールや百科全書家たちが「彼らの作品の主人公として描き」あの時代の社会の笑うべきことや犯罪やを、その淳朴な視力をもつて風刺するために、パリへ来させた自然な本性の人々——あの《ユロン》（無作法）な人々——のような、自由な、明らかな、真摯な視力。現代のヨーロッパを見て判断するために私はそういう展望台を——すなわち兩つの正直な眼を必要とした。

二——見て判断することは出発点にすぎない。その次には行動である。おまえが考えていることを、おまえがじっさいにあるとおりを、おまえは敢行しなければならぬ。——それをあえて言え！ それをあえて実行せよ！ 十八世紀の《率直な人間》なら風刺しているだけで十分かもしれない。しかし現代のきびしい格闘のためにはそれではきやしやに過ぎる。一人の英雄でなければならぬ。そうあるがいい！

『ジャン・クリストフ』を書き始めた頃に同時に書いた『ベートーヴェンの生涯』の序文の中で私は、《英雄》についての私の定義を与えた。「力あるいは思想によって勝った人々に」私は《英雄》という名称を拒む。「心情によって偉大であった人々だけを私は英雄と呼ぶ。」心情という、この語の意味を押しひろげよう！ 《心情》とは単にサンシビリテ（多感性）の地帯だけの意味では

ない。私は心情を、内面生活の広大な領域だと考える。この領域を自由に用いて、この領域の要素的な諸力に基づいて生きる英雄は、敵たちの一世界に抵抗することができるだけの力をもつ。

私の英雄についての考えを私がもち始めた頃に、もちろんベートーヴェンというモデルが私に授けられていた。なぜなら、近代の世界の中で、また西欧の諸国民の中で、ベートーヴェンは、広大な内面の国の主人であるところの、創造的天才力に、あらゆる人間のものに對する兄弟愛の心情の天才力を合一させた異例的な芸術家の一人であるから。

だが、ジャン・クリストフにベートーヴェンの一肖像画をみてとろうとはしないようにくれぐれも用心していただきたい！ クリストフはベートーヴェンではない。彼は新しい別のベートーヴェンであり、ベートーヴェンの新たなタイプの英雄であるが、ベートーヴェンが生きたのとはまた違う一つの世界の中へ、われわれの時代の世界の中へ投げ込まれており、そして自立的存在である。ボンの音楽家との伝記的な類似は、第一巻「曙」の中のクリストフの家庭のもついくつかの特徴にだけ限られている。作品の初めの部分で私がこの類似を欲したのは、私の主人公のベートーヴェンの血統を確定して、彼の根をライン地方のヨーロッパの過去の中へおろして

おくためであった。私は彼の幼時の最初の日々を、古いドイツの——古いヨーロッパのある一つの霧閉気であつた。だが木が大地から伸び出ると、それを取り巻くのは《現代》である。——そして彼自身は、全作を通じて、現代のわれわれの一人である——一八七〇年から一九一四年にいたる、すなわち西欧の一つの戦争からその次の戦争までのあいだの、あの世代の雄々しい代表者である。

彼が成長した世界は、その後に展開した幾多の大きな事件によって粉砕されたといえ、クリストフという樫の木は今もちたえていると私は信じる理由をもつ。嵐はこの木の枝を何本かへし折ったでもあろうが、幹はそのためにもゆるぎはしなかった。私は毎日のようにその証拠を鳥たちによって得ている——世界のあらゆる国々からこの木に一つの宿りを求めに来る鳥たちによって。私が最も心を打たれる事実、そして私がこの作をつくっていたときの私の予想をひどく越えている事実は、『ジャン・クリストフ』がもはやどの国においても異邦人ではないということである。最もはるかな土地、最も相違している諸民族、中国、日本、インド、両アメリカ、ヨーロッパのすべての国々の人々の中から——「ジャン・クリストフは私たちの同族です。彼は私と同族です。彼は私のきょうだいです。彼は私です……」と言いながら来

る人々を私は見た。

そしてこのことが私に私の信仰の真実と、私が自分の努力の目的を達したということとを証明してくれた。なぜなら、私はこの創作の当初に次のような数行を書いた（一八九三年十月）——

《人間的ユニテ（一如）がどんな多様な形をとって現われていようと、常にその人間的ユニテを示すこと。これが科学の第一の目的であると同様に芸術の第一の目的でなければならぬ。これが『ジャン・クリストフ』の目的である》

『ジャン・クリストフ』を書くために私が選んで採用した芸術的形式とスチール（様式）とについて、いくつかの考慮を私は述べておくべきであらう。なぜなら、その考慮のいくつかは、私がこの作品とこの作品の目的とについて持った考え方に密接なつながりがあるから。だが私は、私と同時代のフランス作家たちの大多数がいだいている審美上の考え方とは、まったく違う自分の考え方を述べる一つの《概論》の中で、それについていっそうくわしく論じてみるつもりでいる。

ここでは次のことだけを言うにとどめたい——『ジャン・クリストフ』のスチールは（人々は、またこのスチ

ールだけに従って、不当にも、私の他の作品全体について判断しがちであるが、「カイエ・ド・ラ・キャンゼーヌ」の最初の時期に、私の全部の努力とそして私の《コンミット（戦友）》ペギーの努力とに靈感を与えていたところの主導的な考えにみちびかれていた。われわれがそれを極度に奉じていたところのあのきびしい、男らしい、しかし清教徒的な考えは、くらげみたいな一時代と一環境とへの反動から生まれていたが、それは次のようなものだった。

「率直に語れ！ 虚飾なく、てらいなく語れ！ 理解されるために語れ！ 文学上の趣味においてうるさい人々の一つの群れに理解されるためではなく、無数の人々に、最も質朴な人々に、最も謙虚な人々に理解されるために！ あまりに理解されすぎはしまいかとの心配を決してもつな！ 影やとばりで包むことなく語れ、明瞭にしっかりと語れ、やみがたいときには重苦しい話しぶりでもかまわない！ それによっておまえの足がいつそうつよく地を踏みしめているのなら、それでいい！ そしておまえの考えをいつそうよく人々の心の中へ入れるために同じことばを繰り返すことがおまえのために有効であるなら、くりかえせ。それによって人々の心に滲徹させよ。そのばあいは別のことばを探そうとするな！ ただの一語も失われないようにせよ！ おまえのことばが行

動として生きるがいい！」

これらはこんにちでもやはり、現代の耽美主義に反対して私とその権利を要求するところの諸原理である。そして私は、行動を欲し、行動をになうような作品においてはやはりこれらの原理を適用する。しかしすべての作品においてではない。理解することのできる人なら、『ジャン・クリストフ』と『魅せられたる魂』とのあいだにある、技法の、芸術の、散文的調和の、倍音的諧和の、重要ないろいろの相違をみてとるだろう。『リリュリ』あるいは『コラ・ブルニョン』のような、作の実質が、リズムと音色と交響との、またまったく別な動きと統合とを規定する作品についてはもちろんである。

『ジャン・クリストフ』の中だけでも、全部の巻が、作の初めの部分を規定した要求へ、同一の厳密さで順応しているわけではない。初期のたたかいの清教精神は、以前に「旅の終わり」と題されていた第三群「女友たち」「燃え立つ茂み」「新しい日」の中では和らいでいる。私の主人公が齡を重ねることによって、しだいに彼の上に降りてくる精神のなごやかさとともに、作品そのものの音楽はいつそうふくざつになりいつそうニュアンスのあるものになる。しかし世の定評の慣例は少しもそのことに注意を払わなかったし、一つの作全体、一つの生涯全体について——黒なり白なり——ただ一つの同じ判断

をくだすことで満足している。

*

人々はやがていつか、私の覚え書きを集めてある箱の中に、『ジャン・クリストフ』の内側を説明するだろう。ようなたくさんの記録を見いだすことだろう。とくに、『広場の市』と「家の中」とに描かれた当時の社会に関する記録を。それについて話すことは時期尚早である。

だが、最初の草案がもくろんでいて書かれないままになった一部分のことを言っておくことは、たぶん興味のあることだろう。それは「女友だち」と「燃え立つ茂み」とのあいだに置かれて一巻となるはずの、そしてその主題が「革命」であった部分のことである。

それはソヴィエトでこんにち勝利を得ている「革命」ではない。あの当時（一九〇〇年と一九一四年とのあいだに）「革命」は敗北していた。しかしこんにちの勝利者たちを作り出したのは昨日の敗北者たちなのである。

結局書かれないままになったこの巻の、相当に書き進められていた一つの草稿が私の覚え書きの中に現存している。この草稿の中で、クリストフはフランスとドイツとから放逐されてロンドンに亡命し、あらゆる国の亡命者たち、被追放者たちのいろいろなグループと交わる。彼は彼らのシェーフ（先達者）の一人と親交を結ぶが、

それはマッティーニ^(セ)あるいはレーニンのような資質の人物であり、偉大な道徳的人格である。この強力な扇動者は、その知性と信念と性格とによって、ヨーロッパのあらゆる革命主義運動の指導的頭脳となる。クリストフは、ドイツとポーランドとに突発したこれらの運動の一つに積極的に荷担する。これらの事件、これらの反乱、これらの革命家たちのあいだのたたかいと分裂との物語がこの巻の大部分を占めており、最後に「革命」は潰滅させられ、そしてクリストフは逃亡して、多くの危険を冒した後に、スイスへ移ることができた。そこで愛欲が彼を待ち受けていた。そして「燃え立つ茂み」が来る。

人間の一世代の、この長い悲劇の結末として私はまた、一種の《自然の交響曲》を——“Meeresstille”「海の静けさ」ではなしに、生の偉大な戦闘者が晴れ晴れとそこへ帰還する“Erdstille”「大地の静けさ」を書くことを計画していた。

《私は結局——（と、私は書いた）——この人間的叙事詩の大団円を、私の「革命劇」の大団円にしようと考えているものと同じものにしたくなってしまう。——さまざまな情熱と憎しみが自然の平和の中にとけ込む。無限の空間の静寂が、人間の激動をつつみ、その激動は、一つの石が水の中に沈むように、静寂の中へ沈んで消え